



二十四

神様との縁日を大切に守る収穫感謝祭

# お熊甲祭

〔三十日祭り〕



青空と木々の緑に深紅の杵旗、コントラスト鮮やか

能登では祭りが町自慢のネタになることが多い。以前、知人が自慢気に言った。

お熊甲祭は、毎年9月20日と

決まっている。

学校が休みに

なり、子どもたちも全員祭りに参加す

る。そんな話に興味津津、昨年、お熊甲

祭を見る機会を得た。

## 祭りに異国の風

お熊甲祭は、七尾市中島町の豊作に感謝する秋祭り。地域の結束固く千年以上も続く。地元では二十日祭りと呼び、神様とゆかりのある9月20日に行く。新しい年のカレンダーに掛け替えると真つ先に、祭りの日が何曜日か確認する。土地に暮らす人々はそれほどまでにこの祭りに重きを置いている。

## 奇祭といわれる所以

起源は定かではないが、祭神に異国風の装束をまとった渡来神が祀られていることから、朝鮮半島から入ってきたといわれている。日本海に突き出た能登半島は、古来より大陸との交流があり、多くの文化が海の向こうからもたらされた。奈良時代から平安時代にかけて、大陸に渤海国という国があった。能登の外浦（大陸に面した海）にある福浦港は渤海国との交易で栄えた港だ。

海を越えて渡ってきた神が、内陸に鎮座するのはよくあるケースで、久麻加夫都阿良加志比古神社（くまかぶとあらかしひこ）の祭神も朝鮮半島からやってきた神がこの地に落ち着いたとも伝わる。

この祭りを一目見たなら、深紅の杵旗に異国の影響を感じない人はいないだろう。赤という色からは魔除けや祈禱、祝祭などが連想される。赤は日本はもちろん韓国や中国でも祝祭になくてはならない色であり、深みのある赤は異国情緒を感じさせるに十分だ。

杵旗を担ぐ形は全国でも類をみないとい、一般には行列の先導役を務める猿田彦が、軽妙洒脱に舞い踊るのも珍しい。一番の見せどころである加茂原での島田くずしは、その昔、杵旗の先端が娘の島田に結った髷に触れ、髷がほどけるほど地面すれすれまで下げたことから呼ばれる妙技だ。



海沿いの町は漁業の神様、恵比寿様を担ぐ



のとは(父)楽」という言葉があり、能登の女性は働き者、その上、料理上手ときている。魚をさばくのもお手のもの。とうちゃん釣ってきたイイダコを手早く下処理し、煮物や酢の物にする。赤飯や煮しめとともにお重に詰めて、境内に持ち込む。お昼どきには、木陰で家族と弁当を広げる睦まじ



イイダコと里芋の煮物 イイダコは丸ごと煮付ける

## 重箱に詰めた 祭りごっこお

ちょうどこの頃は、イイダコの季節。地元の人たちは朝早くからこぞってイイダコ釣りに出かける。「大きいのが釣れたわいね」。料理するのは、かあちゃんたち。石川には「加賀のかか(母)楽、能登

い光景が見られる。魚屋の店頭にも並ぶが、祭りの頃は高値がつくのもうなずける。

## 心と心をつなぎ未来へ

同じことが続いていく日々の中で、今年も変わりなくこの日を迎えられる喜びを分かち合う日でもある。能登の祭りを取材すると皆様に、この日のために一年、一日を生きていると話す。単なる行事とか、予定とかそんな軽いものではなく、遺伝子に組み込まれた郷愁の念とでも言おうか。一度廃れたら二度と取り戻せないことがわかっていくから、心と心をつなぎ、未来へとつないでいく。

昨今、祭りを観光資源にする動きが活発だ。多くの人が参加しやすいよう、日程を調整して休日に開催する向きも多い。祭りという一



息を合わせて杵旗を倒す島田くずし



旗が地面と平行になればなるほど大きな歓声が上がる

種のエンターテイメントを集客手段にするのは地域振興策のひとつだろう。しかし、守り継いできたやり方を貫き、変えないのも選択である。

神様との縁日である9月20日をかたくなに守り、学校、職場の理解も得て、地域ぐるみで取り組む。留守番は猫だけといわれ、年寄りには年寄りの、子どもには子どもの、老若男女それぞれに役割がある。二十日祭りは、一人ひとりが地域で生きている意味を確認する日なのかもしれない。

刈り入れの終わった田んぼのあぜには、彼岸花が揺れていた。頬をなでる秋風がひんやりした。

※後でわかったことですが、学校が休みになるのではなく短縮授業で切り上げ、伝統文化の継承に理解を示しているとのこと。